

過去の文化や経済から見る岩船大祭

09K064 竹内 元希

はじめに

岩船大祭の様子を、メディアなどでは「小さな町には過ぎた祭り」などと称しているが、現在の祭礼の形式は江戸時代後期頃からはじまったものだと推測できる。この論文では豪勢な祭礼を可能にした経済背景や、長い歴史の中で絶やさず祭礼を行ってきた岩船の住民の信仰心に着目し、岩船大祭をみていきたい。

1章 岩船大祭の概観

1、岩船大祭の研究史

漁業や廻船業を中心とした岩船の経済や、祭礼を行うまで準備や当日の運行の様子は『村上市史通史編』や『村上市史民俗編』によって研究されているが、経済の発展にともなう祭礼の遷り変りの様子を調べる必要がある。また、岩船大祭をメディアなどが取り上げる際には「船霊祭」と称されるが、船霊は漁師の信仰であり石船神社（石の上に「」を書いてイワと読む）と直接関わりがないのでこれについても研究する必要がある。

当日の祭礼やそれにあたる準備についても年々運行の様子も変わってきているので、これについてもフィールドワークでの調査が必要となる。

2、地名の由来

ここでは、岩船の地名の由来について見ていきたいが、地名の由来を考察するにあたり、岩船に伝承されている昔話を見ていきたい。これについては『岩樟舟夜話』（P1~P2）を参考にする。

「むかしむかしのこと、冬の晩がた、はるか沖あいから、異様な舟が浜べをさしこいで来ました。見ればめずらしい岩の舟で、乗っている人はいかにも神々しいおすがたでありました。舟を乗りすてた神様は、藤のつるでその舟をつなぎ、藤のつるにつかまって、けわしいがけをよじ上って、ようよう、丘の村へお着きになりました。

丘の上には、蘇民将来と巨旦将来の住家が並んでありました。弟の巨旦将来の家は、富み栄えて屋敷も広く、母屋も大きく、りっぱなことはいうまでもなく、裏には庫や納屋がいくつもいくつも続いていましたが、兄の蘇民は貧しいので、せまい屋敷に、たった二室きりの掘立小屋に、こもをかけて住んでいました。

神様は、まず巨旦将来の家にはいって、「旅の者です。行き暮れてとまる所がなく難儀をしております。どうぞ、今夜とめていただきたいのですが…」といわれました。しかし、冬のなかばで、岩船川の鮭とりがまっさかりで、巨旦の家ではたくさんの召使たちが、いっしょうけんめいに鮭の酢漬をつくっていて、相手にしません。「いいや、家にとめてやるわけにはいかぬ。このとおり忙しいのだから、どこかへ行ってくれ。」と、けんもほろろに追い返しました。

となりの蘇民の家はあまりみすばらしいので、丘を下って別の家へ行きました。しかし、どこの家でも鮭の酢漬に忙しいとあって、とめてくれませんでした。日はとっぴり暮れてしまいました。

神様はしかたなしに、また丘を上って、こんどは蘇民将来の家にはいって、「旅の者です。行き暮れてとまる所がなく難儀しております。どうぞ、今夜だけとめていただきたいのですが…。」とたのみますと、蘇民はていねいに、「さあ、どうぞおあがりください。お見かけのとおりの見苦しい家で、しかも、妻がお産をしまして、火はけがれていますが、おさしつかえありませんでしたら、いく日でもおとまりください。」といて、新たにあわの飯をにてもてなし、床にはスガのこもを敷いて、自分は土間のすみっこに小さくなってふせって、旅人には、一室のまんなかに床をのべました。

あくる朝、神様はたいへんごきげんよく、「たいそうお世話になりました。わたしはこれから南の方へ旅立ちますが、それをすませたら、すぐお礼にまいりましょう。」といて、出て行かれました。

それから神様が残していかれた岩の舟は、岩船明神として、その地にまつられました。いく千年たった今もなお、明神様は産火をいむことはなく、また岩船では、川にのぼった鮭をとりませんし、鮭の酢漬もつくりません。そして神様がおつかまりになった藤のつるをたいせつにし、焼かないことにしています。」

ここに出てくる神様は、現在岩船の主祭神である饒速日命とされており、この話は『日本書紀』にでてくる「天磐船に乗りて飛び降りる者ありと（中略）おもふにこれ饒速日が」と『備後国風土記逸分』に記載されており、蘇民、巨旦の説話が合わさった話だと考えることができる。「蘇民将来が一夜の宿を旅人に貸したことで、菜の輪を授かり、蘇民一家は疫病からまのがれた。」という説話をもとにした信仰や祭礼の話は全国的にも例がある。この昔話についても、岩船の多くの家庭、また、小学校の授業などで取り上げられ、「神様が岩の舟に乗ってやってきたから岩船という地名になった。」と子供達に教えている。

この昔話が岩船の地名の由来として地域に根付いているが、この章では少し視点を変え、地形の面から岩船の地名の由来をみていきたい。これについては以下の長谷川勲の文章を参考にする。

「岩船地名の発祥は、饒速日命が岩樟船に乗って来たからではなく、明神山丘陵が沖合いから見て船型地形であることと深く係わっていると思う。しかも丘陵の内陸側には、かつて越後最大といわれた大湖水の琵琶瀧が存在した。この琵琶瀧と日本海とに挟まれて明神山丘陵の磐船はあり、その舳先を石川が洗っているかたちである。上空から見ればそれはまさに海洋に浮かぶ巨船の姿であつたらう。」¹

このように、長谷川勲は、船型地形と岩船という地名が関係していると推測している。また、全国的に見られるイワフネと呼ばれる地域にもこのような特徴があり、それらは地名の由来の根拠として、①人口石が船形、②自然石が船形、③自然地形が船形と、三つに分けることが可能であると分かった。（*表参考）それでは実例をあげて簡単に説明したい。

地名	所在地	関連地形岩石等	社寺信仰等
1.岩船	岩手県宮古市	船底岩床 自然石	岩船大明神
2.岩船	茨城県桂村	船形巨石 自然石	石船神社
3.岩船	千葉県大原町	船形岩塊 自然地形	岩船地藏尊
4.岩船	栃木県岩舟町	船形山塊 自然地形	岩船山高勝寺
5.岩船	新潟県村上市	船形山陵 自然地形	石船神社
6.岩船	新潟県出雲崎町	(勧請・寛永元年)	岩船神社
7.岩船	長野県中野市	(岩水神社に隣接)	岩船地藏尊
8.岩船	京都府加茂町	船形削石 人工石	岩船寺石風呂
9.岩船	奈良県橿原市	削孔巨石 人工石	(放棄石棺説)
10.磐船	大阪府交野市	船形巨石 自然石	磐船神社
11.岩船	大阪市味原町	石棺・塚 人工石	比売許曾神社
12.岩船	島根県安来市	石棺・塚 人工石	印珠寺岩船地藏
13.岩船	島根県斐川町	船形石棺 人工石	神庭岩船山古墳
14.岩船	島根県広瀬町	船形巨石 自然石	磐船神社

①人工石が岩船

京都府加茂町大字岩船には岩船寺があり、寺号の由来として大きな石風呂とほかに船形石がある。奈良県橿原市妙法寺にも岩船地名があり、ここには小高い山の頂上に「益田の岩船」と呼ばれる大きな船形の石造物がある。石には長方形の穴が二つがたれていて、それを結ぶように幅広い浅い溝が掘ってある。

『新潟県の地名』には「この穴と溝ゆえに岩船と呼ばれたのだと思う。ともかくその石棺になりそこねたといわれる石造物が岩船地名のあるじである。」（前掲 i 49P）とある。

②自然石が船形

大阪市交野市に磐船巖という巨大で見事な船形の岩がある。江戸期の「河内名所図会」にも「長さ五丈ばかり」と紹介されている。「先代旧事本紀」には「饒速日命、天磐船に乗りて河内国河上峠ヶ峰に天降り給ふ」とあり、饒速日命伝説をもつ。また、この地に鎮座する磐船神社は、この磐船巖を御神体としている。

③自然地形が船形

船形の自然地形で有名なのは栃木県岩舟町の岩船山である。標高137メートルの平野に突出した全山岩山という山だが、山上に岩船山高勝寺があり、本尊は岩船地藏尊である。茨城県大洗町にある岩船、千葉県大原町にある岩船、どれも自然地形（岩石）から生まれた地名である。

これらのイワフネ地域に共通することは、地名の由来となっているものの性質が岩であり、ほとんどが船の形をしているということである。新潟県地学研究会のまとめた「新潟県平野北縁に分布する第四系と古砂丘について」（1973）によると、明神山丘陵は全山が基盤岩類、すなわち硬質頁岩からなる七谷層である（以上前掲 i より）。

長谷川勲の説からすれば、明神山丘陵は岩の性質をもつ船形地形ということになる。たしかに他の地域と類似している点があるが、これらが村上市岩船の地名の由来とは一概には言えない。長谷川勲も本書で述べているが、岩船という地名と関わりがある饒速日命とも結びついている可能性が高い。そうした知識や信仰を持ち合わせた者が、西の方から対馬海流に乗り来たってこの地形に岩船と命名し、地名と信仰を定着させた可能性がある。これについては4章で詳しく見ていきたい。

2章 漁業から見る岩船の経済

5章で詳しく記述するが、岩船大祭に祭礼屋台が登場し、祭礼が豪勢になっていくのは近世紀ごろであるが、祭礼屋台を建造し、運行するにはそれなりの経済力があつたことがうかがえる。この章では漁業を中心に栄えた岩船の経済をみていきたい。

1、廻船業が発展する以前の経済

農村部で鰯のことをタツクリというが、それは、田を作ることから発生した文言である。田植えができる状態になることをノダテといい、そのとき、タツクリとして鰯を食べる風習がある。

農家がこのように鰯と密接なつながりが持てるようになったのは、『村上市史通史編2近世』（P410～P412）によれば、江戸時代になり地引網や手繰網の漁法が村上、岩船地方でも十分な発達を遂げたからである。特に岩船町は、漁師町として、この漁業の中心的役割を果たしていたことがわかっている。近郊の漁師町である瀬波にも地引網の記録があるが、鰯、鯛、鯖を獲り、海を主たる稼ぎ場にしていったのは岩船であった。また、獲れた魚をすぐに在方に直送する、イサバと呼ばれる振り売りの商人も存在した。彼らは天秤棒にさげた籠に獲れた鰯を入れ、農家に売り歩いた人々である。彼らの活動範囲は関川村の山

間部から朝日村までおよんだ。

岩船では、米沢へ送る子鯛・子鯖を春から夏にかけて釣った。これらは米沢の上杉家への献上品である。岩船町の海水面漁業の権利は、上杉が与えてくれたものとされ、その見返りとして毎年送られた。これを米沢送りという。上杉が与えた漁業権とは、北は粟島見通し、西は佐渡山見通しの範囲である。そして、地引網は沖に向かって一里までの範囲、それより先は配縄（延縄）での鯛・鯖の漁場として、岩船が先行するというものであった。つまり、岩船は沖漁も慣行として、独占する形で保持していたのである。それに対し、近隣の浜では一里より先で配縄をすることができなかった。

このように、岩船は他の近隣の地域より、恵まれた環境の中で漁業を行うことが可能だった。享保20年（1735）の岩船町の総件数は754軒、そのうち漁師の家は189軒である。また、イサバ商人の数は383人もいたことがわかっているⁱⁱ。米沢送りの子鯖の浜焼も第二次世界大戦直後まで米沢の祭礼になくしてはならないものとされ、岩船の特産品としての地歩を固めていた。これらのことから、地引網や手繰網を中心とした漁業が当時の岩船の経済をささえていたことがうかがえる。

2、江戸時代後期

江戸時代、村上藩領になってからの岩船港の変遷は興味深いものがある。前掲書（P454～489）によれば、当初、村上藩領には三面川河口の瀬波、荒川河口北側の塩谷、南側の桃崎、海老江などが、港の役割としては岩船より先行して繁栄していた。しかし宝永6年（1709）に村上藩の領地が減らされたため、海老江が幕府領となり、荒川の水運を利用して運ばれた積荷が、海老江港に集約されるようになる。これに塩谷や桃崎が反発して、海老江への荷物の搬入を実力で阻止した事例もあり、幕府への訴訟によって決着するのに寛政12年（1800）までかかった。寛政期にはいると、米沢商人が岩船港を共同仕入港に指定し、もめごとの絶えない荒川の港を避けて岩船港を利用するようになった。これにより岩船にも港としての整備が求められ、村上藩では寛政9年（1797）に藩の事業として岩船港にいままでなかった船泊まりを築造している。

新潟や酒田といった地方都市には、北前船に積む廻米などが各河口の港から届けられた。岩船から新潟や酒田までの距離の交易形態を小廻りといい、小廻し船が普及する。明和3年（1766）になると、150石積から15石積までの小型船舶が21艘であったのが、天保9年（1838）には27艘に増加している。これらの船のほとんどは小廻し船や、荒川港との往來の小船である。村上藩領において小廻し船を持っていた廻船問屋は、岩船・瀬波、海府浦の早川に集中していたが、中でも岩船は問屋の数が多く、瀬波が3軒、早川が2軒、それに対して岩船は8軒の問屋があった。これだけ多くの廻船問屋が存在するようになったのは、岩船港が次第に商業港としての役割を担いつつあったことを示すものである。

北海道蝦夷地江差との交易もあり、江差の客船帳にも岩船の船が多く登場している。春の彼岸過ぎに荒川地域で造られた酒を積み込み、一週間ほどかけていく。酒は買い積み（自己資本で商品購入）で、北海道で売りさばくと売値と仕入値の差額が丸もうけとなった。この金を元手に、本土側にはない昆布や、安いスルメ・ニシンなどの海産物を買って積み、酒田などで売って帰るのである。9月末にはその年の締めくくりとして江差でアキアジ（鮭）を買取り、新潟まで運んで売りさばいていた。

また、庄内藩酒井家の資料に万延2年（1861）、岩船の船大工が招かれて酒田港で二本帆柱の帆船を造った記録があり、岩船の職人の技術の高さが、当時すでに広く知られていたようである。

岩船は元々漁師町であったが、そこで獲れた魚類を岩船の周辺の農村はもちろん、遠く内陸部の山形や米沢方面に供給していた。そして、そこに港としての機能が加わり、周辺の農村部に商品を供給する、あるいは農村での余剰農産物を売買するという、市場としての商業機能も加わり、商人町が形成されていったのだ。

3、明治以降

『村上市史通史編3近代』（P420～P424）によれば、岩船町は商港の町として栄えていき、明治にはいると新潟―酒田間の定期船、函館―小樽間の不定期船、粟島との定期船などの寄港地となった。入荷は、大半が新潟と北海道からで、食品、石油、肥料、紙などで、出荷は、北海道へ清酒、米、鮮魚、そして造船などであった。おのずと岩船町の商業の姿は、仲介業ならびに小売業として商圈を広げていった。

大正4年刊『岩船町是』（前掲書P420～P421）には、当時の産業経済の実態が記録されている。それによれば「動産・不動産を兼ね有して富車となるものが次第に多くなった～（中略）～商業は他産業にくらべ、ややみるべきものがあるものの、4、5人の重立ちを除けば平均的商いの金額は少なく、特に鉄道村上線開通後は大きな変化があった」ⁱⁱⁱことをあげている。その当時、岩船では大小20を越す廻船業者が流通の主体として活躍していたが、鉄道が敷かれるとそれに廻船を結びつけ、物資の流通をより盛んにした。

岩船駅は町より離れたところにありながら、米、木炭、海産物、缶詰などの積み荷は、村上駅を遥かにしのいでいた。最盛期には120軒もの荷車業者がおり、毎朝岩船港から荷物を満載して駅に向けて出発したという記録が残っている。

4、現在

漁業や廻船業で栄えてきた岩船だが、漁師の数も年々減ってきており、現在平均年齢は60歳以上となっている。このような状況は全国的に見られ、現在若い漁師の育成を国が支援している。岩船にもこの制度によって2人の若い漁師が研修生として来ており、実際に海に出て漁業を学んでいる。

岩船の漁師の数は500人ほどで、そのほとんどは岩船漁業協同組合に所属している。岩船漁業協同組合は昭和35年（1960）頃に設立され、漁業権の共有管理や必要物品の共同購入などを行ない漁師の生活を豊かにしている。漁業組合の主な仕事は、獲れた魚を仲買業者に売る市場業務であるが、製氷業や加工業にも力を入れている。獲れた魚をその場で調理し提供する「漁師食堂」も漁業組合からの発足だが、県外から来る人も多く、休日になると岩船港を賑わせている。

また、新潟県で唯一の粟島への基地として定期船もでており、粟島への積み荷も岩船から運ばれる。

これまで近世頃からの変遷をみてきたが、漁業や廻船業が岩船の経済の中心であった。岩船漁業協同組合の所長である当摩豊さん（昭和35年生）は「昔のように漁業は岩船の経済の中心とまではないが、今でも大きな存在だと感じている。」と言っていたが、それは岩船大祭や漁師の信仰から感じることができると。

3章 岩船の信仰

2章では漁業を中心とした経済をみてきたが、長い歴史の中で岩船大祭を絶やさず行ってきた背景には、経済力だけでなく、岩船の住民の信仰心がある。

1、石船神社の祭神

ここでは岩船の祭神である、饒速日命（主祭神）、貴船神社の三神（水波女命 高龍神 闇龍神）についてみていきたい。

(1) 饒速日命

『日本書紀』孝徳天皇大化4年(648)の条には、「是歳磐舟柵を治めて、以て蝦夷に備う。遂に越と信濃の民を選び始めて柵戸を置く。」とある。また、石船神社の社伝によると、磐舟柵が置かれる前からすでに小祀があったとされている。このことから当時いかにも岩船という名前の集落があったように受け取る事ができ、すでに神様を祀っていたと推測できる。その神様についてははっきりとしたことは分かっていないが、最も有力な説は現在の主祭神である饒速日命とされている。

『地名の由来』で記述したように、岩船という地名は饒速日命と結びついており、そのような知識や信仰を持ち合わせた者が岩船に移住し、地名と信仰を定着させた可能性がある。これについて調べてみると『新潟県県民百科辞典』に興味深い記述があった。そこには「饒速日命は物部氏の先祖であり、物部氏の一族がこの地方に移り住んだと考えられる。」(218P)とあり、物部氏一族の移住の可能性がみえた。

上記の本によると、これを裏付けるように、昭和31年(1956)岩船地区の北東方向にある浦田丘陵から二つの石組みの遺構が発見されている。これらは当初磐舟柵の防御施設と考えられており「石廓堡」と名付けられたが、村上市教育委員会が新潟大学考古学研究室に依頼し行われた調査によると、第一石廓堡は無袖の横穴式石室、第二石廓堡は竪穴式系横口式石室であると判断された。これらの古墳の成立時期は6世紀中から7世紀中ごろとされ、当時の岩船に古墳を運営するほどの勢力が存在したことが推定できる。また、これらのことは大化改新後の中央勢力が北辺の在地勢力をその支配下に組み込む、または利用することにより、城柵経営を進めていったという見方の根拠になる。

『新潟県県民百科辞典』をもとに考えていくと、これらの勢力と物部氏が関係しているとうかがえ、物部氏がこの地に移住した可能性が高くなるように思えるが、征夷の軍事的意義から武神とされる饒速日命を祀った可能性も高い。

(2) 貴船神社の祭神

『村上市民俗編下』には、「大同2年(807)に秋篠朝臣安人が、北陸道観察使として下向した際、社殿を建立し、水神や船に関する祭神三柱を併祀して、貴船大明神と称した。」(214P)とある。貴船神社について調べてみると、京都市左京区の貴船町に貴船神社があり、延長5年(927)に全国の神社をまとめた『延喜式』神名帳に記されている。石船神社も『延喜式』に記されており、はっきりと石船神社として登場するのはこの時が初めてとなる。いつ頃石船神社が登録されたのかははっきりしていないが、『延喜式』は平安時代初期の延喜5年(905)から延長5年(927)頃に完成したため、岩船の歴史の中で、神社として文献に登場するのは貴船大明神が先となる。また、『村上市史』には「貴船大明神と称した後、正徳4年(1714)遷宮を行い石船大明神と復号し、宣旨により正一位の神階を授けられた。」(214P)とあり、私は、貴船大明神ができた大同2年について3つの可能性があると考えた。

一つ目は、もともとあった石船神社を貴船大明神と改めた可能性。二つ目は秋篠朝臣安人が来た大同2年から、石船神社と貴船大明神の二つの神社が岩船に存在し、主に貴船大明神の方を祀っていたという可能性。三つ目は饒速日命を元々祀っておらず、貴船大明神が先に祀られていた可能性である。

三つ目の可能性は大胆な仮説だが、物部氏一族の移住や、磐舟柵が治められる以前にあった小祠に祀られていた神様が不確かなため、この可能性も考えられるのではないだろうか。残念ながら岩船神社に関する資料は火災によりほとんど残っていないためはっきりとしたことはわからない。いずれにせよ、岩船の住民の信仰心は世代から世代へと継承されている。その信仰心、地域力においても、岩船大祭を運営する力の一つである。

2、船霊信仰

これまで石船神社の祭神をみてきたが、岩船大祭はメディアなどで取り上げられる際には「船霊様の祭り」などと言われる。船霊について石船神社の禰宜である小野正典さんに尋ねてみると、「岩船大祭は船霊祭りと言われるが石船神社の神様でもなければ石船神社に関係はない。誰かが作った造語。」と言っており、高橋俊雄さんも「昔は船霊祭りとは言わなかった。岩船大祭が昭和63年に新潟県の無形民俗文化財に指定された頃から船霊祭りと言うようになった。船霊とは漁師達の信仰」と言っていた。ここでは岩船の漁師の船霊信仰を他の地域と比較してみたい。

船霊信仰は地域によってとらえ方や名称、信仰の仕方が違う。『日本民俗大辞典・下』(484P)の「船霊」の項を参考に船霊について簡単に説明したい。

船霊様は、船乗りや漁師などの海で働く人々によって祀られている神様であり、船の守護神的性格を持ち、航海安全や大漁祈願を祈る対象になっている。伝統的な木造船では帆柱を支えるためのツツ柱・ツツバサミなどと呼ばれる柱に四角の穴を彫り、船霊様の御神体として、男女の人形（女性だけの場合もある）、女性の髪の毛、賽2個、銭12枚、五穀などを船大工が船おろし（進水式）の時に納める。正月の船霊祭は、乗り初め、船祝いなどと呼ばれる。船霊は女神とされることが多く、女性が一人で乗船することを忌み嫌う習慣があるが、男神あるいは男女の神としてまつる場合もある。船乗りや漁民からは、船霊はときに船を去ることがあると考えられ、船から女性が降りる姿を夢に見た船首が海難にあった話や、船霊が「イサム」とか「シゲル」といって、鈴のような音を立てて吉凶の前兆を知らせるといわれている。

(1) 岩船の船霊信仰

はじめに岩船で納める御神体についてみていきたい。岩船では、女性の人形、女性の髪の毛、化粧品、賽2個、12の紅白餅を納める。人形や髪の毛、化粧品について岩船町にある瀬賀造船の社長である瀬賀兵次さんに聞いたところ、「船霊様が女性とされているから」と言っていた。

賽は2個納めるのが全国的に見ても一般的で、「天一地六表三合せ艫四合せ」などという。一を上に向け六を下にし、表に三の目、艫に四の目が向くように2個合わせて納めるのが普通であり、岩船もこれと全く同じ納め方をする。賽については、塞の神と結びつける説、サイサキが良いとのこじつけだという説がある。

12の紅白餅は十二船霊からきていると考えられる。十二船霊に対して十二山の神があり十二社の信仰がある上に、12の餅にしても船霊様に限らず、山の神や他の神にも供え、大神宮様に供えている例もあり、また人に送る際に12の餅を入れるという伝承もある^{iv}。

これらの御神体を船おろし（進水式）の前日の夜に納める。岩船では、船おろしという呼び方ではなく、「台降ろし」と呼んでおり、船を作る前に行う「台乗せ」という儀式、そして台降ろしの前日の夜に行う「船魂心入儀式」がある。「台乗せ」「台降ろし」の呼び方の意味は、船を作る際に「船台」という台に乗せて作ることからこの呼び方になった。「台乗せ」では船の製作が安全に進むことを願い、石船神社の神主にお祓いをしてもらう。この日は大安を選び、お神酒や鯛などの縁起のいい肴をお供え物とする。「船霊心入儀式」では、造船所の棟梁と船主が船に乗り儀式をする。この時船は海の方角に向けられる。0時を合図に棟梁が祝詞を上げ、「ツナトリダチ」と呼ばれる柱に四角の穴を彫り御神体を納める。儀式が終わり、家に帰る時に後ろを振り向いてはいけないという掟がある。「台降ろし」は「台乗せ」と同じ方法で儀式を行い、出来上がった船は海に降ろされ、はじめて漁にでる。その際、湾内を左まわりで

3回まわり、必ず岩船神社の前を通らなければいけないという岩船の漁師達の掟があり、この時岩船神社に向かって大漁満足、海上安全を願う。

岩船の漁師である丸山久雄さんに聞いたところ、岩船では1月7日を初神楽といってこの日を年初めの船霊信仰の日とし、正月に家で食べる縁起の良いご馳走、お神酒、赤飯、鯛などの縁起のいい肴をおかもちに入れて船に持って行く。また、1月19日を縮神楽といってこの日も同じように参拝する。岩船大祭の宵祭りである10月18日の朝方と本祭りである10月19日の朝方にも、同じように祭りで食べるご馳走をおかもちに入れ、参拝する。しかし、同じく岩船の漁師の伴田貢さんに聞いたところによると、「18日は夕方おがみにいく。」と言っており、2人に違いがあった。この他に1月と8月のお盆、祭りがある10月以外に、毎月1日と15日に岩船神社に参拝しに行く習慣があったが今では毎月参拝しに行く人が減り、3月、7月、9月に石船神社にいき、自分の名前が書かれた幣束を貰う。丸山兵次さんは、「名前が書かれた幣束を貰うのは漁師だけである。」と言っており、漁業で栄えた岩船ならではの特色が見られる。

他の地域の船霊信仰

岩船と同様に、他の地域で納めている御神体からみていきたい。(主に、髪の毛、人形、賽、五穀)

髪の毛に関しては、1、単に女性の髪の毛であればいいという場合。2、限られた女性の髪の毛である場合。3、男女の髪の毛を合わせて納めている場合。このように三つに分けることができる。1についてはすでに述べたと通り、岩船と同じなので省略する。

限られた女性の例として、伊豆諸島の八丈島では髪の毛を奉納する女性のことを「フナダマササギ」まれに「オフナ様」と呼んでいる。多くは幼い女兒であるが、まれに老婆の場合もある。この「フナダマササギ」から、その人の衣の布を少しと、髪の毛を貰い御神体にする。これが幼女であった場合には、月事を見るようになると船との関係が絶えて、資格を失うのである。また、船おろしの儀式の時にはこの女性に新しい衣装を着せて船の真ん中に据え、船造りの小屋から浜まで引いていく。このことを牧田茂氏は「今では、髪を入れることによって船との関係が生じると考えているだろうが、実際は船霊様として、または船霊様を祭る者として、その船と関係づけられたために髪を与えるのであろう。」⁴⁾ といっており、「フナダマササギ」と呼ばれる女性が巫女のような存在であったと推測している。また、同じく伊豆諸島の三宅島ではこうした女性を「カミイレ」と呼んでおり、その髪の毛を御神体として納め、船が漁に出ると浜にある漁の神に参拝し、船が帰ってくると船に上って船霊様を拝み、漁の初物を貰ってくる⁵⁾。

男女の髪の毛を合わせて納めている場合に関しては、男女一対の人形を納める思想に導かれたものであると考えられる。それでは、人形について見ていきたい。

人形は簡単に紙で作ったものが多く、男女一対であることが多いが、女の人形だけの場合もある。人形について牧田茂は「人形に対する柳田先生のお説を借りると、昔はそんなものがなくとも人々は神を見ることができたのであるが、やがて神を幻に見ることができなくなったために人形を造って、それを通じて神を幻覚するようになったと考えられるのである(日本民俗学講座「信仰生活と人形」)」⁶⁾と述べている。全国的に船霊様は女の神とされているのに対して、男女一対の人形の場合が多く存在していることは不思議である。しかし、周防大島では男女の人形を前と前とを合わせて納めており、漁業もやはり生産行為であるため、生産信仰の要素があると考えられる。

五穀を納めている地域としては八丈島が挙げられるが、五穀を納めている地域は非常に少ない。土佐や対馬では船おろしの時にお供え物として供えられ、船霊祭の日にお供えられるという例も豊後の北海部をはじめとして各地に見られる。岩船では五穀を御神体ともお供え物ともみなしていない。

他の地域の御神体についてみてきたが、大きな船には御神体を入れ、小舟にはないという地域もあり、岩船はこれに当てはまる。秩父の長瀬などでは内陸の小さな川舟だが船霊様を祀り、御神体を納めている。また、船霊信仰そのものは存在するが、船の大小にかかわらず御神体がないという地域もある。この形式は、男鹿半島、佐渡、越後、丹後といった日本海沿岸の村に多く見られ、その他、九州では宗像郡鐘ヶ崎、西彼杵郡茂木町などにも例がある。

そこで、1、人形や髪の毛、賽といった御神体を納めることが船霊信仰の元の姿であり、次第に簡易化されて何も納めなくなったのか、2、それともこの二つの状態の存在は船霊信仰に二系統あることを示すものなのか、3、または最初は御神体を納める必要がなく、品を納める習慣がついたのか。このように三つの信仰の形態が考えられる。

羽後の男鹿半島では、お寺のお札や春秋の村の祭りで配られるお札を船のミオシにつけておく場合があるが、村人はお札を御神体のようには見えていない。しかし、男鹿半島では船霊信仰が希薄な状態にあるのではなく、むしろ他の地域より濃厚な部分がある。大正月と小正月のそれぞれの歳の晩と元旦の早朝に船で行う儀式があるが、その際、松や譲り葉などの正月飾りと、鱈のような肴、洗米を持って船にお詣りに行く。(男鹿半島では「お詣り」という)船(ハギ船)のツツマイという帆柱をたてる場所にハヤ緒を結びつけ、この品々を供えて拜むのである。また、1月11日は船霊の元日といわれ、同様に船へお詣りに行き、この時には栗の餅米の餅、お神酒などを供える。そして、ハヤ緒と銭さしと半紙で巻いたものに松、譲り葉を添えて紅白の紐で縛ったものを船(ハギ船)のツツマイのところに結びつけてくる。このように1月11日を船霊の元日としているのは、日本海側一帯に見られ、岩船の近郊の瀬波や上海府、また、九州にも例がある。

岩船の船霊信仰でも述べた通り、岩船にも大正月に船に参拝する習慣があり、毎月岩船神社にも参拝していた。この形式の船霊信仰はやはり日本海側一帯に見られる船霊信仰と共通のものだろうと考えられ、決して新しい作法とは思えない。また、御神体を納める形式の信仰が日本海側以外の地域で濃厚だった。そこで気になるのが岩船での御神体の存在だが、岩船と近くに位置する藤塚浜の漁師達の証言が鍵になる。越後藤塚浜(現在胎内市)の漁師たちは「ベンザイ舟は骸子や人形、銭などの御神体を納めていたが、自分たちはしなかった。」ⁱⁱⁱと言っている。

ベンザイ舟について辞典で調べてみると、「廻船・商船のこと。べんざいせん、ともいう。弁才船は中世末に瀬戸内で開発され、近世に入って普及し、近世中期以降の海運の発達とともに主力となり、典型的な荷船・商船として一般化していった。」ⁱⁱⁱとある。2章の岩船の経済で述べた通り、この時代の岩船港は廻船業で賑わっており、小廻り船を所有している廻船問屋が多く存在した。天明5年から万延元年(1785~1860)にかけて庄差港に入港した岩船、瀬波、上海府の小廻り船は、いずれも弁才と呼ばれる3~5人乗りの船である。また、近世期には大型廻船もしばしば寄港していたので、沖掛り(やや沖での停泊)などをすれば、大型船の寄港もまったく不可能ではなかったようである。

このように岩船港には大型廻船が寄港し、弁才船を所有している。『新潟県史・資料編23民俗・文化財二民俗編II』(472P)の「海の信仰」の項を見ると「古老の伝承を総合してみると、船玉さんは船そのものを尊敬して呼ぶのが古態のようである。したがって神体がないものももとの信仰であったと考えられる。~中略~やがて近世に廻船活動が盛んになって、おそらく瀬戸内方面からやってくる船乗りらが保持している船霊神体を、ことごとしくしつけられる方式を習い覚えて伝承され、実修するようになったものと思われる。」とある。また、岩船港の商園は山形の酒田港から新潟港に及ぶ範囲であったため、これらのことから岩船も弁才船を通じて御神体を納める形式の信仰が伝わってきたと推測でき、船霊信仰に二系統ある可能性が高くなる。また、寛文5年(1665)に紀伊国船が岩船沖で遭難したことからはじ

まっ、安政2年（1855）10月の瀬波船の座礁まで、多くの遭難関係の記録が残されている。このような遭難事故が続いたため、御神体を納める形式が弁才船から伝わり、御神体を納めるようになったと考えられるのではないだろうか。

岩船と他の地域の船霊信仰についてみてきたが、石船神社と漁師達には結びつきがあった。しかしこれは船霊信仰とは別の信仰であるように思える。特に船霊の元日が他の日本海側の地域や、同じ村上市である瀬波や上海府とは違う日にちであり、漁師達は定期的に石船神社へ参拝に行く点は岩船独特の信仰のように思える。また、進水式の際に石船神社を拝みながら船出をする様子は興味深い。フィールドワークでは船霊と石船神社の関係性がないと指摘している人が多かったが、岩船の漁師達には一般的に言われる船霊信仰と石船神社の氏子としての信仰が結びついているのではないだろうかと私は感じている。

4章 岩船大祭における組織

1、現状

現在岩船大祭は「岩船祭り運営委員会」によって運営されている。岩船祭り運営委員会とは、岩船大祭に関わるあらゆる組織、団体の代表者によって構成される（平成11年7月31日に結成）。主な活動は、神社でかかる祭礼費の予算作成や祭礼当日の交通規制についての警察への連絡、交通規制案内図の配布などである。

組織の構成は「平成21年度岩船祭り運営委員会資料」によると「氏子総代6名・氏子会13名（各町内区長）・岩船祭り若連中運営委員会・岩船祭り保存会会長・木遣り保存会代表2名・岩船まつり先太鼓の会代表2名・岩船地区青少年健全育成会会長・岩船地区交通安全協会会長・岩船商工業会会長」となっている。小野正典さんからの聞き取りでは、「主な祭り運営や準備は氏子総代、氏子会、若連中が主体で、それらで決めたことを9月の下旬に行われる岩船大祭全体会議で他の組織の代表と確認して決定する。」と言っている。また、岩船祭り運営委員会が結成されるまでは氏子総代、氏子会、若連中運営委員会が岩船祭りに関わる運営をしていた。小野正典さんの話からもわかるように、今でもその名残が強く、この3つの組織が中心となって全体を動かしている。この章では特にそれらの組織の変遷をみていきたい。

2、変遷

（1）かつての若連中

上町の資料である『祭礼勘定帳』天保2年（1831～）を見ると「若連中へ酒一升」「七夕入用割…ゞ老貫拾文 内八百文 若連中へもとす」とある。これが現在上町にある資料の中で最初の若連中の登場である。また、安政4年（1855）に上大町の若連中の規約があり（大若連中定^{ix}）、大若若連中もこの時代に存在したことがわかる。

ここでは祭礼以外に当時の若連中がどのような活動をしていたか、私の町内である上町を対象に考察していきたい。

若連中について調べてみると、「明治の中ごろまで、若連中が町の火消し（消防）を担当していたが、その後、防火組、消防団と変わり、現在に至っている。〔改〕若連中の組名は、その当時の名残という。」^xとある。火消しについて辞典で調べてみると「1717（享保2）年の火事後、大岡忠相の手によって町火消しの制度が作られた。（中略）村方では江戸時代には、五人組や若者組が消防に従事した～。」^{xi}とあった。岩船は村上藩の領地であったため、このような影響を受けたとすれば、村上が岩船よ

り先である。また、岩船の火消し組織を作る際に少なからず城下町の影響をうけたのではないだろうか。当時の岩船の様子、若連中の活動を考察するにあたり、当時の村上の様子をみてみたい。

村上が現在のような市街地に発展するきっかけとなったのは、慶長3年(1598)である。この年に村上周防守頼勝が転封して来て村上城下の整備を行い、本格的に城下町の形態を整えていった。村上城下の家数の推移を調べてみると、慶長2年(1597)の252軒に対し、宝永7年(1710)には819軒になり、約3倍強の増加となっている。また、これには城下町の経済意義を高めるねらいがあり、百姓と商人を分離し、武士と商人を城下に吸収していった。このような政策が都市化を生み、人口の増加と住宅の密集を進めることになったが、このような住宅の密集は大火の原因となり、村上城下では10軒以上焼失した火事が多発していた。

先に説明したように、享保2年(1717)に、大岡忠相の手によって町火消しの制度が作られたが、村上でもこの年に火消しの制度が生まれており、「北越村上城主歴代譜」に「火消人足」として記されている。また、その火消人足の出動状況も記されているのだが、「表新町武家屋敷出火 御物頭初御足軽 火消人足共早速魁着」^{xii}とあるように、火消人足が出動したのはお城と武家屋敷の火災だけで、町方に出勤した記録がない。岩船の火災についても「岩船町出火 六軒焼却 下目付当地逗留故 早速走参着」^{xiii}と書かれているが、下目付役がきたという記述だけで、火消人足はきていない。では、誰が町方の火災を消したのか疑問に残るが、その後の小町風呂屋火災の記録を見てみると、「～略～近所之もの欠付 早速水かけ～略～」^{xiv}とあり、近所の人達が協力して消火しているのがわかる。

その後、享保12年(1727)の正月の覚書に、火事場を近隣の町内に設置したことが記されているが、これは享保6年の久保田町の火災により見直されたものだと思う。これをきっかけに町方の火消しが充実していき、村上での大きな火災は少なくなっていく。

(村上城下、その近辺の主な火災)

西暦	年月日	火災の概要	焼失棟数
1660	万治2年	寺町から出火	45
1664	寛文4年3月4日	庄内町から出火	67
1668	寛文8年4月16日	武家屋敷出火	97
1671	寛文11年3月5日	小町出火	13
1705	宝永2年3月6日	肴町から出火	10
1715	正徳5年4月25日	肴町越前屋より出火	83
1721	享保6年6月15日	久保田町から出火	120
1742	寛保2年2月29日	塩町から出火	7
1744	寛保4年4月13日	細工町から出火	27
1756	宝暦6年4月5日	大工町火災	3
1773	安永5年7月2日	肴町から出火	2
1787	天明7年11月9日	片町から出火	1
1793	寛政5年6月11日	塩町から出火	3
1798	寛政10年5月19日	羽黒町から出火	24
1805	文化2年5月6日	長井町から出火	1
1823	文政6年7月23日	大町から出火	1
1827	文政10年3月26日	飯野から出火	1

岩船の「火消し」関連の記述がないか、竹内裕さんに尋ねたところ、江戸時代後期頃の大火のようすが記されている『伴田家文書』の「御用留メ帳」の一部分を活字に直して提供してくれた。これは、当時岩船の庄屋であった伴田家の資料であるが、どのような方法で消火したのかは記されていない。この頃に火消し組織が誕生していないとすれば、小町風呂屋火災の記録にあるように、町の人達が協力して消火していたことがうかがえる。

そこで上町の火消しに関する資料を探し、防火道具を購入している記述を発見したが、それらの記述は明治19年以降(1886)のものであった^{xv}。その内容を見てみると、不要になったと思われる車切や笠鉾といった祭祀関係の備品を売却し、「雲龍水(消防ポンプ)」を購入している。さらに、明治20年(1887)には、「鳶口」「防火着」^{xvi}を購入し、それ以降の資料には、消防に関する新しい道具の購入や買い足しや整備など、消防関係の記述が多く見られた。さらに、明治32年(1899)「耆番組人名調印名簿」が作られ、そこには、「旧規ヲ改廃シ新二耆番組規約ナルモノヲ編製シ以テ義務団体と成ス」と記されている。『村上市史民俗編下』の「～若連中の組名は当時の名残である。」にあるように、これが現在の名称である「上町若連中一番組」の誕生の年である。

(岩船の火災)

西暦	年月日	火災の概要	焼失棟数
1719	享保4年6月23日	岩船町から出火	6
1731	享保16年4月16日	岩船町から出火	不明
1742	寛保2年12月2日	岩船庄屋、庄左衛門から出火	863
1748	延享5年3月25日	朝七ツ半から昼四ツ半まで焼ける	
1750	寛延3年5月25日	朝七ツ半から昼四ツ半まで焼ける	
1754	宝暦4年7月12日	岩船上町から出火	6
1755	宝暦5年11月5日	岩船町から出火	5
1767	明和4年1月21日	岩船下町から出火	143
1771	明和8年3月23日	岩船新町から出火	6
1777	安永6年4月18日	岩船町出火、岩船町不残焼失	700以上
1804	文化元年11月	八日市から出火	25

明治以前に火消し組織があったことは資料や文献ではわからなかったが、この被害状況からすると充実した火消し組織がなかったように感じる。岩船は海の近くに位置しているため、強風により火災が拡大してしまう。近所の人達が協力して消火できる火災もあっただろうが、村上とは距離があるため、岩船には独自の火消し組織が必要だったことがうかがえる。

(2) 現在の若連中

すでに述べた通り、火消し組織の名称をそのまま組名にしている町内が多く存在する。若連中のどの町内も各世帯の長男が15歳になると入会を義務付けられており、41歳で満期退会することになっているが、若者が減った最近では二男以下の子供の入会や、退会期間を延ばしている町内がほとんどである。

若連中には階級があり、町内によって連中の統括者を組長と呼ぶ町内と頭取と呼ぶ町内があり、その他の階級も町内によって呼び方が異なっている。

「一番組規約」（21年改定）の第1章総則、第2条をみると「本組は、上町区および上町区民のための奉仕団体として、組員相互の親睦を図り、伝統行事の運営その他の活動を通じて、よりよき地域社会の建設に寄与する事を目的とする。」とある。この規約にあるように、若連中はあくまで奉仕団体として様々な行事に参加し、地域の中心となって盛り上げている。5章で詳しく記述するが、『村上市史・民俗編下』にも「全く若連中任せの祭りと言っても過言ではない。」（218P）とあるように、岩船大祭当日の運行は若連中が主体で行う。

消防団に関しては、町内単位ではなく各町内の有志が活動している。主な活動は消防車の無線やポンプなどの機械の点検だが、その時に水の出し方や消火方法を習っている。岩船や岩船の近隣の地域で火災が起きるとサイレンを鳴らし、出動しなければならないが、「消防団に所属している人達のほとんどは働いているので、休日以外は出動できない。」と消防団員である松田忠行さんは問題点を指摘していた。

（3）その他の組織の変遷

氏子会・氏子総代

岩船町の中で祭礼屋台をもつ町内は、岸見寺町・地藏町・上大町・上町・上浜町・下大町・下浜町・横新町と縦新町・中新町・新田町（三町内で惣新町として一台の屋台）であり、この他に、三日市・北浜町の住民が石船神社の氏子であるとされており、その代表として各町内の区長は氏子会に所属することがならわしとなっている。

氏子の中から数名の氏子総代が選ばれ（定数不定—現在は6名）、その内の2名は漁業関係者から選ばれる。まさに漁業によって栄えてきた漁師町らしい特色の一つだと言える。また、石船神社の宮司は氏子会の責任役員という肩書きで総代会に参加しており、氏子会、氏子総代が岩船祭り運営委員会の中核になるといえる。

岩船祭り保存会

岩船祭りは昭和63年に新潟県の無形民俗文化財の指定を受けたが、保存会は指定に際して組織された団体である。無形民俗文化財指定の理由は、「とも山神事」が他に例を見ない貴重な行事であるとされたからである。

木遣り保存会

岩船の木遣り唄の伝承を目的として組織された有志による団体。

岩船まつり先太鼓の会

祭礼行列の先導役の「先太鼓」を務める有志による団体である。願を掛けて先太鼓に奉仕する人も多い。

5章 岩船大祭の変遷と現状

1、岩船大祭の変遷

岩船祭りは、祭神が岩船の地にお着きになった日として9月19日を祭礼日としてきた。ただしこれは陰暦で、明治5年に太陽暦が採用になったが、祭礼日は変更することなく9月19日に行ってきた。たまたま、明治天皇が、明治11年9月19日に新発田へご巡行になることになり、岩船大祭と重なったため、町の人達が拝観に行く都合により、祭礼の期日の変更を県知事へ願い出た。そしてこの年以後、祭礼日は10月19日に実施するようになり現在に至っている（前日18日が宵祭り、19日が本祭り、20日はハバケヌギとっている）。

岩船で最初に造られたとされている下浜町の祭礼屋台の完成は享和2年(1802)だが、それ以前、享保20年(1735)には、「笠鉾」を出し物としている^{xvii}。この「笠鉾」について磯辺幸雄さんに聞いてみたところ、「どの町内も祭礼屋台ができる以前は笠鉾を出し物としていた。笠鉾を出し物としていた頃は、若連中ではなく、町内で運行していたと聞いている。若者は町内の一員として祭礼行列に関わっていたらしい。」と語っていた。

また、他の町内の祭礼屋台について調べてみると、「古来、上大町は町の中心に当たり軒数は少ないが、蔵持の資産家が揃っていた。屋台が老朽した安政5年(1858)に新調し現在に至っている。」^{xviii}とあり、下浜町の祭礼屋台が造られた享和2年(1802)以降、次々と現在あるような祭礼屋台が造られていったことがうかがえる。さらにこの時代は、すでに前章で述べたように、北前船の就航によって海運業が盛んになり、岩船が繁栄した時代である。大勢の若者を組織として動かし、屋台を豪勢にできることが可能だったと感じる。

2岩船大祭

(1) 当日までの若連中の動き（主に上町・一番組の組織を参考）

岩船大祭に関わる活動を始めるのは6月に行われる「岩船祭り若連中委員会」の会合からである。ここでの話し合いを元に各町内で執行部が定期的集まり、祭礼で使う予算や当日の祭礼屋台の運行、組員の役割分担を決める。そして9月の上町区祭礼委員会で、区長・上町区役員・若連中執行部が集まり、若連中から出された屋台曳き出し費用の予算原案を中心に審議し、祭礼費の予算案を作成していく。

祭礼屋台が出されるのはどの町内も10月16日の朝となっている。石船神社境内のしゃぎり小屋（各町内の屋台を格納する棟割の収蔵庫）から若連中によって曳き出されるが、この日は手伝い衆と呼ばれる若連中に所属していない女性やお年寄りや子供たちも一緒になり、屋台曳き出しに参加する。手伝い衆は縄を引き、組員は屋台の手木や心棒の両端について屋台の後押しに当たる。組長の掛け声と共に屋外に曳き出された屋台は、各町内の当宿まで曳かれ、その家の前に置かれる。組員は二手に分かれ、一方は屋台の清掃から点検に当たり、当宿の茶の間に飾り物を安置する。もう一方は町内で祀っている神社の境内や広場などに幟の枠を立て、長い竿を取り付けており、宵祭りの18日には、この竿に「正一位石船神社大明神」と染め抜いた長さ10メートル余りの長い幟が取り付けられる。10月17日には組員一人一人に役職が書かれた法被と提灯が執行部により配分され、祭礼当日の役割を確認し、岩船大祭が無事に行われる事を喜び、宴をする。

10月18日早朝、若連中は当宿に安置された飾り物を祭礼屋台に飾り付け、屋台曳き出しの準備に当たる。準備が終わるころ神主が各町内を巡回し、屋台の安全を祈願し、災難を除くお祓いをする。ここに区長、若連中の幹部（執行部）が立ち会い、下付された大麻は屋台に納め祀る。

18日の午後、各町内の屋台は一斉に曳き出され、まず町内を一巡したあと、上岩船（上大町・上町・上浜町・横新町・縦新町・中新町・新田町）と下岩船（岸見寺町・地蔵町・下大町・下浜町）に分かれて巡行する。宵祭りの巡行は、老若男女関係なく、その町内に住んでいる者ならば屋台の曳き回しに参加することができ、若連中は私服で工夫役を努め、手木、心棒、後梶などを勤める。また、屋台の後ろに各町内の重立ち衆（若連中退会者）が続いて警護に当たっている。これらの人達は紋付き袴に青竹の杖をついており、この青竹を警護杖と呼んでいる。町の人達は縁起をかつぎ、神社境内の竹林から採取している。また、この竹林のササは家の神様に供える赤飯の下敷きにする。

これらのことから、若連中任せの祭りであることが感じられる。小野正典さんによれば、「9月下旬に行う岩船大祭全体会議で交通規制や時間規制などが決められるが、当日の若連中の運行で全てが決まる」と言っている。竹内新一さんも、「当日の若連中の運営には口を出さないのが暗黙の了解」と言っていた。この発言からも岩船大祭では若連中が中心になっていることがわかる。

（2）他の組織の動き

氏子会・氏子総代

岩船祭りに関わる主な活動は、神社でかかる祭礼費の予算作成や祭礼当日の交通規制についての警察への連絡、交通規制案内図の配布などである。

岩船祭り保存会

現在、岩船祭り保存会は主に祭りの文化的側面の研究や保存、岩船大祭のポスターの作成と配布を行っている。

（3）家庭や子供達の様子

昔から岩船では、祭りのために1年を13カ月にして働かなければといわれるほど祭りの費用がかかり、それが1カ月の生活費にも当たることから、過分の出費を稼がなければならなかった。現在も、1カ月分の生活費に当たるといことがうかがえるほどの「ご馳走」が用意される（大量の酒、オードブル、お寿司、梨や柿などの果物、その他家庭で作った料理）。これらの事を磯辺幸代さんに尋ねてみると「岩船の神様が一年に一回、氏子がどんな生活をしているか見に来る日。ご馳走を沢山用意して賑やかな様子を見てもらわなければいけない。今ではあまり見られなくなったが、昔の人達は縁起の良い紅いお膳にご馳走をのせて用意した。障子を全部外して立派な屏風や人形を自慢した人も沢山いた」と語っており、石船神社の禰宜である小野正典さんも「町に神様が降りて行き氏子がどんな生活をしているか見られる日」と言っていた。磯辺さんも言っていたように、現在ではこのような風習はあまりみられなくなった。

囃子の稽古のことを『村上市史・民俗編下』には「町内の屋台に乗る子供たちは、祭りの前の10月7日から17日にわたり、毎晩太鼓と囃子の稽古を続け〜」（220P）とあるが、現在は町内によって練習期間に違いがある。中学生は大太鼓を叩き、小太鼓は小学生の高学年、鉦は中学年が受け持ち、低学年の子供は囃子を唱和している。これらに関しても町内の子供の数によって受け持つ学年の違いがあるが、笛吹きの大人達の熱の入った厳しい指導の元、祭礼に向けて稽古を受ける。稽古最終日の17日は当宿で行い、稽古の総仕上げをする。岩船ではこのような最終の稽古のことを「アシゾロイ」（足揃い）と言っている。

18日夜7時頃から、神社では宵宮の神事を行う。拝殿には参拝者があふれ、長い参道には各町内の提灯が明るく、行き帰りの人々で賑わう。この時の服装は正装（礼服）が基本だが、近年では私服姿の人

や、法被を着て参拝する若者も多く見られる。これについて竹内新一さんは「昔だと法被を着て参拝に行くなんて考えられない」と言っており、高橋俊雄さんも「神様の前だから正装で行かなくてはいけない」言っている。二人の発言からもわかるように、世代により岩船大祭に対する考え方の違いがある。また、子供達は屋台衣装、学校の制服が基本であったが、この年代も私服の方が多く見られるようになった。

(5) 岩船大祭の比較

先太鼓、御船迎え

宵祭りの神事が終わると、神社の籠り堂では先太鼓の奉仕者（岩船先太鼓の会）が夜籠りをしている。12時を過ぎると、太鼓と鉦を叩きながら神社を出発し、上、下岩船を巡回する。従来、先太鼓は上、下岩船を6回巡回した後、岸見寺町の御船様（明神丸）の船迎えを行っていたが、現在は3回巡回した後、岸見寺町の当宿を訪れて、御船曳き出しの案内を伝える。そこで若連中はデカイと言って、互いに祝い酒を交わした後、先太鼓の先導で神社に向かう。

御霊遷し

19日の早朝、各町内の屋台は威勢よく明神橋を渡り、社前に出揃う。神社では神事を終え、社前に神輿を安置して御船様の到着を待つ。やがて先太鼓の先導で神社に到着した御船様は、岸見寺の若連中によって屋台の上台から降ろされ、イサミの音頭で長い参道を登り、社前の神輿の右側に据えられる。続いて横新町の御神馬（白駒）も横新町の若連中に担がれ、長い参道を登り、神輿の左側に供奉する。

ここで御船と御神馬に幣束が授けられ、御霊遷しの神事が行われる。まず本殿から神輿まで白布を敷き、白紙でマスクのように鼻と口を覆った神主が神霊を捧げ持ち「オーオー」という警蹕の声のもとに神輿に安置する。ここで巡行中の神霊の安奉を祈る祝詞を奏上し、神事を終え、渡御に移る。この御霊遷しの際には御船様は舳先を社殿に向けており、5本の幣束をもらうが、小野正典さんは「5本の幣束は岩船の神様を表している。饒速日命、ミズハメノミコト、タカオカミノカミ、クラオカミノカミ、船霊様と言われているが、資料がないため正確なことは言えない」と言っていた。

御旅所、屋台出発

御霊遷しの神事を終え、先太鼓の先導で、御船様は若い衆がかついで参道を下る。これに続き、玉槍、鉦などの行列を先頭にして神輿が出発する。これに神主初め、氏子総代が警護に当たり、このあと御神馬が続く。

下山した神輿は境内の旅所に安置される。旅所での神事が終わると、曳き出した岸見寺の屋台（すでにこの時御船様は上台に乗せられている）は船の舳先を神輿に向け、初めて木遣り唄を御霊に捧げる。幣束を手にした3人の歌い手が交替でうたい、大勢の曳き手の若い衆は一節ごとに音頭を取る。

旅所での神事を終え、木遣り唄を神霊に上げ、いよいよ明神橋を渡り、町の巡行に入る。このことを『村上市史・民俗編下』では「御船の橋を渡る情景は美しく、更に勇みさえうかがわれる」（226P）と表現しており、御船様だけを見に来る町の人達や観光客も少なくはない。

この後、各町内が続いて屋台の手木を神輿に差し向け、囃子の一節を上げ、明神橋を通り、社前から町の巡行に向かう。近年では橋を渡る前に餅まきを行う町内も増えている。

町の巡行では、御祝儀をもらった家に手木を向け、お返しとして手ぬぐいを渡す。返礼に行った若い衆（2、3人）は茶の間に招かれ酒をごちそうになる。また、親戚の家や知り合いの家に招かれるので、若い衆がなかなか屋台に帰って来ない光景はどの町内でも見られる。

浜の御旅所（第二御旅）

浜の御旅所は、現在町の南側（新町外れ）に設けられているが、昔は町の南端の砂浜にあった。ここに神輿が安置され、傍らには御神馬（白駒）が供奉し、ここに氏子総代をはじめ、御神馬関係の若連中（横新町の執行部）などの列席のもとに神事が行われ、神事を終えた後、お供え物を供える。この時間帯は各町内とも昼休憩の時間帯であり、磯辺幸代さんは「神様もお昼休憩をする。お供え物をして休んでもらう」と言っていた。

昔は祈願者名簿（御神馬名簿と称していた）を朗読していたが今は行っていない。

提灯付け

浜の旅所の神事を終え、神輿は先太鼓を先導に再び巡行に入る。各町内の屋台が上岩船を巡行し終わる頃には夜となり、ようやく夕食となる。

この間に神輿には、各町内の提灯がつけられ、各町内の屋台の上台の両側面には、三段に提灯をつけ、下台正面左右には、特に縦長の提灯を一つつけている。また危険を防止するために、屋台の下部車軸の中央付近に提灯を一灯つけており、屋台曳きの若連中は片手に町内の組名、役職のついた弓張り提灯をかざして縄につく。

浜回り

『村上市史・民俗編下』には「下岩船の下浜町・岸見寺・地蔵町に入ると漁師衆が多く、また、大正ころには回船業者の家も続き、御船はこれらの家々で木遣りを上げている」（227P）とあるが、現在は上、下岩船関係なく、御祝儀を上げた家に木遣りを上げている。大正時代に御祝儀を出した家に木遣りを上げていたかはわからないが、もしそのシステムがあったとしたら、漁業によって栄えた岩船の漁師町内の経済力が関係していたのではないかと私は考えている。

夜も更けたころ、御船・神輿に続いて各屋台は、町の北端、地蔵町の海岸から石川の河口沿いを巡行する。第二次世界大戦前には砂浜続きであったので、屋台曳きは難渋し、若い衆は浜回りで、酔いも、ふつとんだという話が残っている。現在は舗装道路となっているが、昔は砂浜だったため、この河口沿いの巡行を浜回りと呼んでいる。浜回りに入る前の地蔵町は小路が多く、屋台がぎりぎり通れるか通れないかの間隔のため、各町内の腕の見せ所となっている。祭りは早朝から深夜に及び、酔いつぶれた若い衆も大勢いるが、地蔵町の巡行には人手がいるため、しっかりと屋台に戻り、指示された役割をこなしている。

浜回りを終えると、御船様（岸見寺）、御神馬（横新町）以外の町内は帰り囃子で町内に戻り、町内を一巡した後、当宿の前に屋台を据え、後片付けをして解散となる。

鱸山神事

神社では、浜回りや町の巡回を終えた神輿、御船様、御神馬を朝の御霊遷しと同様、社前に安置し、神霊を本殿に納める鱸山の神事が行われる。この神事は朝の御霊遷しの式と全く逆の順に行われるが、とくに重要なことは御船の鱸が社殿に向けられ、神霊が神殿に御遷座される。このことを高橋俊雄さんは「神様が御船様から降りやすいように鱸を向けている」と言っていた。この後御船は拝殿に安置され、ここに神霊の安奉を願う鎮めの木遣り唄が上げられる。

御船様を神社に納め、大切にしている理由は、岩船の主祭神である饒速日命が岩の船に乗って岩船にやってきたとされているからである。高橋俊雄さんや磯辺幸代さんは「漁師町内の中で特に漁師が多く、経済的に栄えていた岸見寺が御船様を作り、饒速日命が乗ってきた船を表している」と言っていた。

御神馬については、「昔の人達の交通手段として馬が使われていたから神様の乗り物として祭礼に登場するようになった」とフィールドワークで多くの人が言っていた。

祭りの翌日の20日を「ハバケヌギ」と称しているが、最近ではこの日を「後祭り」と言っている人が多い。脛巾（はばぎ）は脛に巻く脚半で、脛巾を脱いで休養するという意味である。しかし現実には、町内の区長初め、当宿の主人、若連中は屋台や小道具などの後始末で休養どころではない。当宿の前に置かれた屋台を神社境内の収蔵庫前まで曳き、祭礼前の屋台搬出と全く逆の手順で収納する。前日の疲れもいとわれない後始末は、執行部の指示により手際よく行われる。

ここまで祭礼について見てきたが、昔から漁師の多い町内が御船様を祭礼屋台の飾り物とし、朝の神社では御神輿に向けて木遣り唄を捧げている。やはり岩船の漁師と石船神社の関係性が強く、岩船独自の漁師の信仰があるように感じられる。

また、年々運行のしかたが変わってきており、近年では餅まきなどのイベントや、従来なかった屋台同士のお囃子の掛け合いなどをおこなっている。当日の運営、運行は若連中の権限が強いが、「直接神様と関わることは変えてはならない」という声も多かった。

おわりに

岩船大祭では岩船の住民ではない見物客も茶の間に通され、ごちそうになることが多く、岩船独特の雰囲気驚いている様子をよく見かける。若連中に入ったばかりの若者は屋台巡行の際に返礼にいき、「どこの家の子だ」「どこの町内の子だ」と聞かれることが多く、年を重ねるごとにその家の家族にも顔を覚えられ、「知らない家」が「毎年ご馳走になる家」に変わる。この雰囲気は若連中や氏子会といった直接祭礼に関わる組織がつくるのではなく、岩船に住む人達全員が自然につくりだしている。この温かい雰囲気を忘れられず、県外に出ていった多くの人も「この日だけは帰らなければ」と言っている。

現在でも「小さな町には過ぎた祭り」と言われる理由はこのような岩船の地域力だろう。しかし、その裏には、漁業や廻船業によって栄えた近世期以来の経済力、岩船の氏子としての信仰心があり、それは年寄衆から若い衆へ引き継がれている。

私も岩船に生まれ育った一人として、この祭りを後世に伝承し、この地に生まれたことを誇りにしてゆきたい。

注

- i 越後・佐渡を語る会編『新潟県の地名』野島出版 1996年,57pより
- ii 村上市史編纂委員会編『村上市史・民俗編下巻』平成2年,439pより
- iii 村上市史編纂委員会編『村上市史・民俗編下巻』平成2年,42pより
- iv 牧田茂著『海の民俗学』岩崎美術社 1966年,171pより
- v 牧田茂著『海の民俗学』岩崎美術社 1966年,163pより
- vi 牧田茂著『海の民俗学』岩崎美術社 1966年,169pより
- vii 牧田茂著『海の民俗学』岩崎美術社 1966年,207pより
- viii 福田アジオ他編『日本民俗大辞典下』吉川弘文館 2000年,509pより
- ix 村上市史編纂委員会編『村上市史・民俗編下巻』平成2年,216pより
- x 村上市史編纂委員会編『村上市史・民俗編下巻』平成2年,218pより
- xi 日本風俗史学会編『日本風俗辞典』弘文堂 昭和54年,307p
- xii 八藤後友次郎著『火と火消し物語』村上印刷株式会社 平成18年9月,185p『北越村上城主歴代譜』(享保4年4月11日)より
- xiii 八藤後友次郎著『火と火消し物語』村上印刷株式会社 平成18年9月,185p『北越村上城主歴代譜』(享保4年6月23日)より
- xiv 八藤後友次郎著『火と火消し物語』村上印刷株式会社 平成18年9月,185p『北越村上城主歴代譜』享保7年1月18日より
- xv 『車切糶売控簿』(岩船上町) 明治19年(1886)
- xvi 『諸入費割出帳』(岩船上町) 明治20年(1887)
- xvii 「下浜町文書」協力 磯辺幸雄
- xviii 村上市史編纂委員会編『村上市史・民俗編下巻』平成2年,261pより

フィールドワーク協力者

- 瀬賀兵次さん 昭和9年7月23日生まれ 瀬賀造船社長 下浜町在住
竹内富子さん 昭和12年1月8日生まれ 上町在住
磯辺幸雄さん 昭和12年10月17日生まれ 下浜町在住 氏子総代
相馬幸雄さん 昭和14年2月9日生まれ 元船乗り 地藏町在住
高橋俊雄さん 昭和14年5月23日生まれ 元氏子総代
丸山久雄さん 昭和22年6月17日生まれ 漁師 岩船町岸見寺在住
小野正典さん 昭和39年4月17日生まれ 石船神社、禰宜 三日市在住
竹内新一さん 昭和35年5月1日生まれ 自営業、岩船祭り保存会副会長、上町在住
当摩豊さん 昭和35年12月5日生まれ 岩船漁業協同組合所長 地藏町在住
横田幸生さん 昭和48年5月8日生まれ 会社員、上町一番組組長 村上市在住
竹内裕さん 昭和49年2月12日生まれ 村上市教育委員会、生涯学習課 村上市在住
松田忠行さん 昭和60年3月18日生まれ 上町在住 会社員

参考文献

- 村上市史編纂委員会編『村上市史・民俗編下巻』村上市 平成2年
村上市史編纂委員会編『村上市史・通史編1 原始・古代中世』村上市 平成11年
村上市史編纂委員会編『村上市史・通史編2 近世』村上市 平成11年
村上市史編纂委員会編『村上市史・通史編3 近代』村上市 平成11年
福田アジオ他編『日本民俗大辞典上』吉川弘文館 1999年
福田アジオ他編『日本民俗大辞典下』吉川弘文館 2000年
飛鳥勝辛編『祭礼行事・新潟県』桜楓社 平成5年
野島出版編集部編『新潟県民百科事典』野島出版 1977年

小島美子他編『祭り・芸能・行事大辞典上下』朝倉書店 2009年
日本民俗史学会編『日本風俗辞典』弘文堂 昭和54年
下中弘他編『京都、山城・寺院神社大辞典』平凡社 1997年
平凡社編『大阪の地名』平凡社 1986年
下中邦彦編『京都府の地名』平凡社 1981年
神道大系編纂会編『神道大系 延喜式神名帳註釈』神道大系編纂会 昭和61年
新潟大学考古学研究室編『磐舟浦田山古墳群発掘調査』村上市教育委員会 1999年
新潟県教育委員会編『磐舟』新潟県教育委員会 1962年
新潟県教育委員会編『岩船』新潟県教育委員会 1969年
新潟県立村上高等学校地理歴史部編『岩船潟』新潟県立村上高等学校 1975年
牧田茂著『海の民族学』岩崎美術社 1966年
馬場信彦『新潟県の地名』野島出版 1996年
八藤後友次郎著『火と火消し物語』村上印刷株式会社 平成18年9月

参考資料

村上市岩船上町伴田家『伴田家文書～御用留々帳』 安永6年
村上市岩船上町会館『祭礼勘定帳』 天保2年
村上市岩船上町会館『車切糶売控簿』 明治19年
村上市岩船上町会館『諸入費割出帳』 明治20年
村上市上町会館『壺番組人名調印名簿』 明治33年
中村忠一『岩樟舟夜話』 昭和48年

(卒業論文指導教員 神田より子)